

名大トピックス

NAGOYA UNIVERSITY TOPICS

No.234

2012年11月

名古屋大学レクチャー2012を開催



目次

●ニュース	
名古屋大学レクチャー2012を開催	3
平成24年度名古屋大学公開講座を開講	4
舩京理事がミャンマーを訪問	5
平成24年度大学院秋季修了式を挙行	5
平成24年度秋季入学式を挙行	6
平成24年度大学の世界展開力強化事業に採択される	6
平成24年度博士課程教育リーディングプログラムに採択される	7
●知の先端	
幹細胞パラクライン因子を使った次世代再生医療	8
上田 実 (大学院医学系研究科教授)	
●キャンパスクローズアップ	
理農館	10
●知の未来へ	
葡萄 ^{ぶどう} の房状分子が拓く未来のエネルギー材料	12
一分子クラスター二次電池の開発	
吉川 浩史 (大学院理学研究科助教)	
●部局ニュース	
第18回国立大学新構想学部教育・研究フォーラムを開催	13
松永前経済産業省事務次官による講演会を開催	13
解剖弔慰祭を挙行	14
平成24年度脳とこころの研究センターシンポジウムを開催	14
農業ふれあい教室「DNAを見る」を開催	15
第3回組込みシステム研究センターシンポジウム・	15
第6回次世代自動車公開シンポジウムを開催	
ICCAE 2012年度第2回オープンセミナーを開催	16
第83回防災アカデミーを開催	16
「名古屋・東海地区における機関リポジトリコミュニティ形成の支援」	17
第1回研修会を開催	
展示会「歴史の時間」を開催	17
●名大を表敬訪問された方々	18
●新たに締結した学術交流協定	18
●構成員を対象とした研修	19
●本学関係の新聞記事掲載一覧 平成24年9月16日～10月15日	20
●イベントカレンダー	23
●ちょっと名大史	
総長か学長か ― 名大をひきいた人びと 番外編 ―	28

名古屋大学レクチャー2012を開催





- | | |
|-------|---------------------------|
| 2 3 | 1 会場の様子 |
| 1 | 2 講演をする赤崎特別教授 |
| | 3 名古屋大学レクチャーシップの表彰楯授与式の様子 |

名古屋大学レクチャー2012「青色LEDが拓いた光の革命」が、10月6日(土)、豊田講堂において開催されました。

同レクチャーは、本学が主催する最も重要な講演会の1つで、今回で8回目となります。分野を問わず、世界的に著名な研究者の講演を広く一般市民の方々に公開し、現代世界の最高の「知」に触れてもらうために行われるもので、講演者には、名古屋大学レクチャーの称号及び表彰楯が授与されます。

今回は、青色LED(発光ダイオード)の発明者で、名城大学終身教授である赤崎 勇本学特別教授が講演しました。赤崎特別教授は、何十年もの長い歳月をかけ、地道な努力、屈強な精神力、そして他に類のない研究遂行能力によって、窒化ガリウムを用いた高輝度の青色LEDの開発を成し遂げました。赤崎特別教授の発明によって初めてLEDで全ての色を表現することが可能となり、白熱電球からLED照

明への光の革命をもたらしたことから、「現代のエジソン」と評されており、文化勲章の受章やエジソン・メダルの受賞など、国内外から高い評価を受けています。

当日は、まず濱口総長があいさつを行い、次いで、「知の拠点」シンクロトロン光センター所長である竹田美和本学特任教授が、「青色LEDの意義」と題し、青色LEDの基礎や赤崎特別教授の人柄について、分かりやすく話しました。

続く名古屋大学レクチャーの称号授与式及び表彰楯贈呈式では、総長から赤崎特別教授に「聖人が現れ、平和で学問が尊重される世の中になる前兆」とされる「麒麟」をモチーフにデザインされた名古屋大学レクチャーシップの表彰楯が贈呈されました。

次に、赤崎特別教授が、「コバルトブルーに魅せられて」と題し、実用的な高い輝度を出す青色LED実現までの長い道のりについて、講演を行い

ました。材料である窒化ガリウムの高品質な結晶を作るのが困難であったため、青色LED技術の実現は不可能だと多くの研究者が見切りをつけていった中、「これこそ自分の仕事だ」と決して諦めずに、「ひとり荒野に行く」の心境で黙々と挑み続けていた青色LED実用化に込めた思いにも触れ、研究の神髄を感じ取ることができる講演となりました。最後に、「夢をもとう」、「失敗を恐れない」、「最後まで諦めない」、「疑問を大切にしよう」、「輪(仲間、友達)を拓けよう」と若い世代にエールを送りました。

最後に、近藤高等研究院長による閉会のあいさつがあり、大盛況のうちに終了しました。今回は、本学教職員、一般市民の方々など1,000名程度が参加し、熱気溢れる講演会となりました。参加者からは、「大変感銘を受けた」、「赤崎特別教授の研究への情熱を充分に感じられた」などの感想が多数寄せられました。

平成24年度名古屋大学公開講座を開講

平成24年度名古屋大学公開講座が、8月16日(木)から10月11日(木)までの間、経済学部第2講義室において開講されました。同講座は、本学の研究成果を広く一般に紹介することを目的に毎年開講されており、今年で43回目となります。

今年度は、平成23年3月に発生した東日本大震災が未曾有の被害をもたらし、大地震や津波により発生した原子力発電所の事故による放射能汚染など、現在も社会に深刻な影響を与えていることをふまえ、総合テーマを「危機に立ち向かう英知－解決への展望－」としました。

今回の大震災は、私たちの社会が抱えてきた様々な問題を顕在化させました。例えば、大規模災害からの生活再建にどのような支援が必要なのか、次の大地震にどのように備えたら良いのか、これからの日本社会はエネルギーをどのようにまかなっていくのか、高齢化の進んでいる地域経済を再生することは可能なのか、復興のための財源をいかに確保するのか、被災者の心のケアをどう進めるべきなのか、など様々な問題の解決に向けての提言が必要です。



会場の様子



表彰式の様子

残念ながら、現在の科学者が持っている知識で、あらゆることに明確な展望を指し示せるわけではありません。しかし、本学の各研究者は、それぞれの分野でこうした危機に立ち向かうために、研究を続けています。同講座では、そうした研究活動の一端を市民の皆さんに知ってもらい、さらには、直面している危機とともに立ち向かっていく機会となるように、文系、理系、医学系などの様々な分野で最先端の研究をしている本学教員による全15回の講義が行われました。各講義終了後には、講師を務めた教員に対して受講者から多数の質問が寄せられるなど、関心の高さが窺われました。

10月11日(木)に行われた閉講式では、渡辺理事があいさつを行い、平成19年度から導入している受講者への表彰制度に基づき、平成10年度以降に5年参加した5名の方に表彰状を、10年参加した4名の方に表彰状と記念品を手渡しました。さらに、今年度は初めて7名の方が15年参加の基準に該当し、同じく渡辺理事が表彰状と記念品を手渡しました。また、受講者135名のうち講義に10回以上出席した115名の方には修了証書が発行されました。

なお、参加者の多様化を図るとともに、高校生に本学への関心を持ってもらうための試行として、平成22年度に開始した近隣の高等学校に対する公開講座への参加の案内を、今年度も受講料を無料として行ったところ、県内の2校から延べ7名の参加がありました。

また、公開講座開講に先立ち、7月1日(日)から9月2日(日)の毎週日曜日には、東海ラジオから、ラジオ放送公開講座「名古屋大学リレーセミナー」として全10回の放送を行いました。

鮎京理事がミャンマーを訪問

鮎京理事を団長とする本学代表団が、9月18日(火)から22日(土)までの間、ミャンマーを訪問しました。

本学はこれまで、ミャンマーに対して、人材育成無償支援事業により、市場経済化に必要な法整備のための人材を育成したり、アジア諸国のナショナル・リーダーとして活躍することが期待される若手指導者を対象としたヤング・



記念撮影

リーダーズ・プログラムにより医療行政に携わる人材を育成するなど協力をしてきました。今後、本学として、同国の大学と本格的に学術交流を進めるために、今回の訪問で代表団はミヤ・エイ ミャンマー教育大臣と面会しました。

面会の場では、近い将来、本学とヤンゴン大学が大学間学術交流協定を締結して共同研究を推進するとともに、同大学内に本学の活動拠点として「名古屋大学ミャンマー・日本法情報センター（仮称）」を設置することを約束しました。同センターは、両国の法情報を発信するだけでなく、同国における本学の活動拠点として活用する考えです。ヤンゴン大学は、1920年に設立されたミャンマーで最も古い国立大学で、本学は日本の大学として初めて協定を締結することを目指します。

本学は既に50名を超えるミャンマー出身の卒業生を輩出しており、名古屋大学全学同窓会ミャンマー支部を来年設立する予定です。同国では、長年の欧米からの経済制裁により、先進国の中では日本が唯一の留学受け入れ先であったため、ミヤ大臣をはじめ日本への留学経験がある人物は、政府や大学の幹部として各方面で活躍しています。

平成24年度大学院秋季修了式を挙行

平成24年度名古屋大学大学院秋季修了式が、9月27日(木)、豊田講堂において挙行されました。

今年度の秋季の大学院修了生は、修士課程及び博士課程前期課程37名、医学博士課程及び博士課程後期課程51名の計88名となりました。

濱口総長、役員及び各研究科長の列席のもと挙行された



記念撮影をする修了生ら

式典においては、総長から各研究科の修了生代表に学位記が授与され、次いで、修了生に対し、本学における課程を修了したことへのお祝いの言葉と、本学において学んだ知識や技術をさらに研鑽し、世界の発展のために貢献することを希望する旨のはなむけの言葉が贈られました。

これを受け、修了生を代表して大学院工学研究科のチヨン チェンア 丛 振华さんから、修了生一同は専門分野こそ異なるが、本学における研究で培われた素養を基礎として社会の発展に寄与するとともに、昨年の震災により問題が浮き彫りとなった原子力発電に象徴されるような最新技術の明暗についても常に考えながら、社会に貢献していきたい、と総代の辞として力強い言葉が述べられました。

平成24年度秋季入学式を挙行

平成24年度名古屋大学秋季入学式が、10月5日(金)、豊田講堂において挙行されました。

今年度の秋季入学生は、学部50名、大学院128名(修士課程及び博士課程前期課程47名、医学博士課程及び博士課程後期課程81名)の総勢178名となりました。新入学生には、留学生特別コース、大学院医学系研究科修士課程医科



祝辞を述べる総長

学専攻医療行政コース(ヤング・リーダーズ・プログラム)等の留学生のほか、「大学の国際化のためのネットワーク形成推進事業(グローバル30:G30)」により昨年度から開始した「国際プログラム群」に入学する留学生も含まれています。

G30は、大学の機能に応じた質の高い教育と、海外の学生が日本に留学しやすい環境を提供する国際化拠点の形成に向けた取り組みを総合的に支援するものです。我が国の高等教育における国際競争力を強化し留学生らにとって魅力的な水準の教育等を提供するとともに、留学生と切磋琢磨する環境の中で国際的に活躍できる高度な人材を養成することを目的としています。国際プログラム群では、海外から本学を目指す優秀な学生等に対し、大学院のみならず学部でも秋季入学を実施しており、英語で行われる授業のみにより学位を取得することが可能です。

名古屋大学交響楽団が演奏するパッヘルベル作曲の「カノン」で始まった式典では、濱口総長から英語で祝辞が述べられ、続いて役員等の紹介がありました。その後、大学院環境学研究科の應治麻美さんが、入学生総代として、入学にあたって学生としての本分を全うすることを宣誓しました。

平成24年度大学の世界展開力強化事業に採択される

平成24年度大学の世界展開力強化事業が選定され、本学から1件が採択されました。

同事業は、世界に雄飛する日本として誇れる人材の育成を目指し、国際的な枠組みで、高等教育の質の保証を図りながら、日本人学生の海外留学と外国人学生の戦略的受け入れを行うアジア・米国等の大学との協働教育による交流を行う事業に対して、重点的に財政支援することを目的とするものです。今年度は、これまでの「日中韓のキャンパス・アジア」や「米国、欧州等との交流事業」に加え、東南アジア諸国連合(ASEAN)地域との交流の拡大を支援し、大学の世界展開を促進しています。

事業は、「日本とASEANにおける大学間で1つのコンソーシアムを形成し、単位の相互認定や成績管理等の質の保証を伴った交流プログラムを実施する事業」である区分Ⅰと「ASEANとの質の保証を伴った交流プログラムを実施する事業のうち、日本人学生が留学先の現地の言語や文化を学習するとともに、現地の学校等での日本語指導支援や日本文化の紹介活動を通じて、学生自身の異文化理解を促すことを海外留学の目的の1つとして位置づけ、将来、日本とASEANとの架け橋となるエキスパート人材の育

成を目指す事業」である区分Ⅱの2種類に分かれています。

申請は全体で、71件(62校)あり、採択されたのは、14件(12校)でした。(採択率19.7パーセント)

本学から採択された事業は以下のとおりです。

区分Ⅱ(採択件数5/申請件数17)

プログラム名: ASEAN 地域発展のための次世代国際協力リーダー養成プログラム

相手大学: シンガポール国立大学(シンガポール)、
チュラロンコン大学(タイ)、
フィリピン大学ロスバニョス校(フィリピン)、
ガジャ・マダ大学(インドネシア)、
ホーチミン市法科大学(ベトナム)、
ハノイ法科大学(ベトナム)、
王立法経大学(カンボジア)

平成24年度博士課程教育リーディングプログラムに採択される

平成24年度博士課程教育リーディングプログラムが選定され、本学から2件が採択されました。

同プログラムは、優秀な学生を俯瞰力と独創力を備え広く産学官にわたりグローバルに活躍するリーダーへと導くため、国内外の第一級の教員・学生を結集し、産・学・官の参画を得つつ、専門分野の枠を越えて博士課程前期・後期一貫した世界に通用する質の保証された学位プログラムを構築・展開する大学院教育の抜本的改革を支援し、最高学府に相応しい大学院の形成を推進することを目的とするものです。

事業は、国内外の政財官学界で活躍し、グローバル社会を牽引するトップリーダーを養成する、大学の叡智を結集した文理統合型の学位プログラムを対象とした「オールラウンド型（オールラウンドリーダー養成）」、環境、生命健康、安全安心、物質、情報、多文化共生社会等のテーマで、人類社会が直面する課題の解決に向けて、産学官等のプロジェクトを統括し、イノベーションを牽引するリーダーを養成する、複数領域を横断した学位プログラムを対象とした「複合領域型（複合領域リーダー養成）」、世界的に独自の優れた資源を活かし、新たな分野を拓くリーダーを養成

する学位プログラムを対象とした「オンリーワン型（オンリーワンリーダー養成）」の3プログラムにそれぞれ分かれています。

申請は、全体で124件（70校）あり、採択されたのは、24件（17校）でした。（採択率19.4パーセント）

本学から採択された事業は以下のとおりです。

オールラウンド型（採択件数2／申請件数6）

プログラム名：PhD プロフェッショナル登龍門

コーディネータ名：杉山 直 理学研究科教授

複合領域型（横断的テーマ）（採択件数2／申請件数16）

プログラム名：フロンティア宇宙開拓リーダー養成プログラム

コーディネータ名：田島 宏康 太陽地球環境研究所教授

連携先機関：スタンフォード大学エフィシエントエナジーコンバージョンセンター（アメリカ）、モナシュ大学グリーンセンター（オーストラリア）、JX日鉱日石エネルギー株式会社、株式会社東芝

幹細胞パラクリン因子を使った次世代再生医療

上田 実 大学院医学系研究科教授

イモリの手足や尻尾は切断しても元通り再生します。しかし人間ではこうはいきません。イモリの再生力の秘密がわかれば人間の手足も再生できるかもしれない。これが再生研究者の究極の夢です。

イモリでも人間でも傷ついた体が治るには、いろいろの組織のもとになる「幹細胞」という細胞が重要な働きをします。この細胞は普段はおとなしくしていますが、いったん体が傷つくと猛烈に

増殖していろいろの細胞に分化して体をもとにもどそうとします。また体の恒常性を維持するためにも細胞が壊れるたびに分裂をして細胞を補給する働きがあります。イモリと人間の再生力のちがいはこの幹細胞の数と能力に差があるからなのです。イモリは体のいたるところに、高い増殖能・分化能のある幹細胞が存在すると考えられます。しかし人間の幹細胞はごくわずかの細胞種にしか分化できず、増殖力にも限界があります。ですか

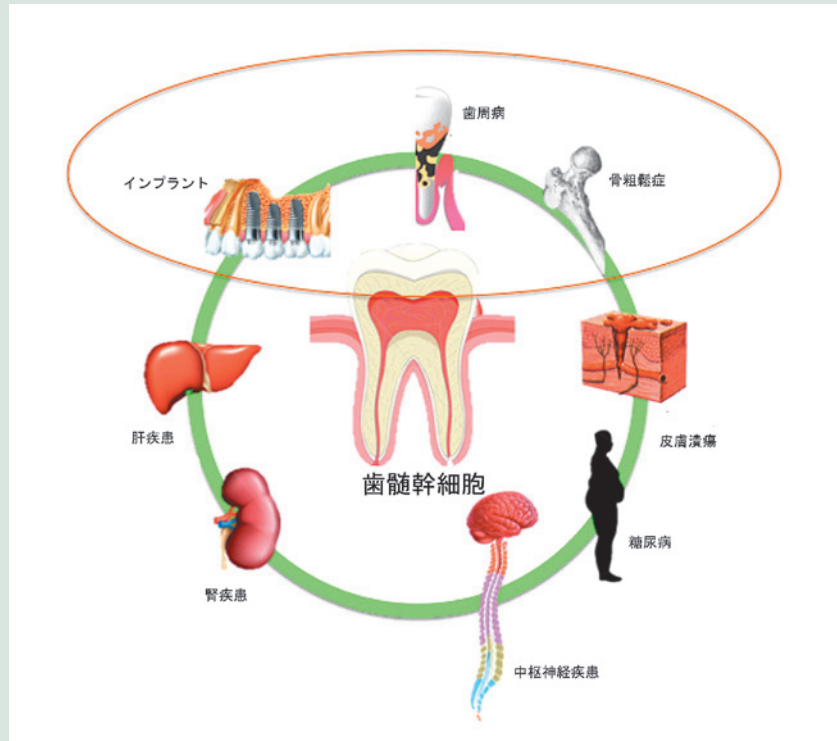


図 1

ら人間では、皮膚や毛髪のようにごく限られた組織・臓器でしか再生はみられないのです。普通の幹細胞に人工的に万能の分化能と増殖能を与えたのがiPS細胞です。iPS細胞を使うことで、特定の機能をもった幹細胞が大量に供給できますから、再生医療の実現可能性が高まりました。しかし、細胞の腫瘍化というリスクが残っていて、臨床応用の妨げになっています。

ところがごくまれに人の体内にも、非常に再生力の高い幹細胞が存在します。歯髄幹細胞（SHED; Stem Cell from Human Exfoliate Deciduous Teeth）がそのひとつです。われわれは子供の歯（乳歯）の幹細胞を破壊された脳や脊髄に移植すると、ほぼ完全に機能が回復することを実証しました。さらにこの細胞は、肺、膵臓、肝臓に生じた障害をも劇的に改善することがわかりました（図1）。では移植されたSHEDはどのようなメカニズムで治療効果を発揮したので

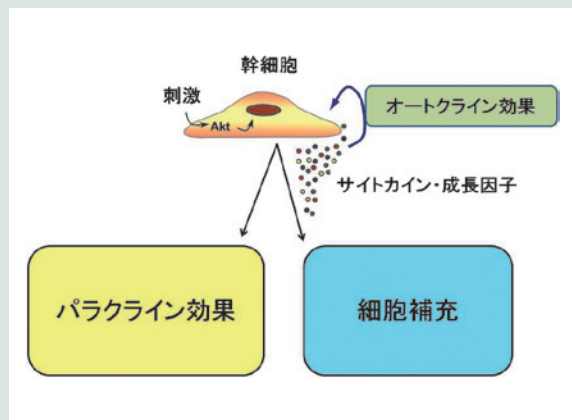


図2

しょうか？ひとつには破壊された細胞の補充（cell replacement）があります。ふたつめは幹細胞の生産する液性因子（paracrine factor）が体内に存在する幹細胞に作用して組織を再生させる、というメカニズムです（図2）。われわれの研究では、幹細胞の生産したサイトカインは幹細胞移植と同等かそれ以上の再生効果があることが分かっています。この方法であれば、生きた幹細胞を移植しないので、移植した幹細胞が腫瘍化する懸念がなくなります。

こうして再生医療は幹細胞由来パラクライン因子をつかった次世代再生医療に進化をとげ、いっしょに実用化しようとしています。

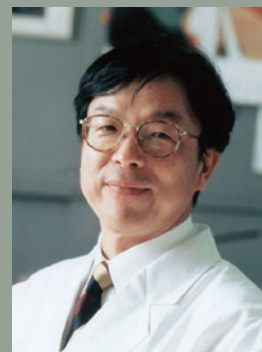
幹細胞が生産するサイトカインは500種類以上にのぼります。幹細胞と同等の効果を発揮するためにこれらのすべての要素が必要です。主要成分だけでは幹細胞と同じ効果は得られません。われわれはこうした幹細胞由来サイトカイン複合剤を組織・臓器の再生医薬品として臨床応用したいと考えています。

- ・第2期地域科学技術施策推進委員（文部科学省）
- ・科学技術・学術審議会専門委員（文部科学省）
- ・独立行政法人新エネルギー・産業技術総合開発機構技術委員（NEDO）
- ・「疾患特異的iPS細胞を活用した難病研究」課題選考委員（文部科学省）

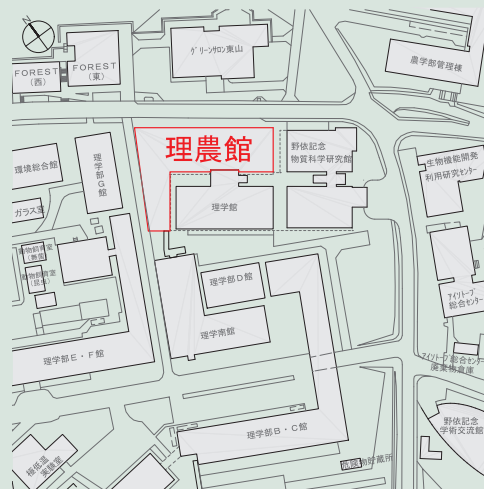
1949年大阪府生まれ。1982年名古屋大学医学部大学院卒業後、名古屋大学医学部口腔外科学教室入局。同教室講師、助教授を歴任し、1990年よりスウェーデン・イエテボリ大学とスイス・チューリッヒ大学に留学。1994年名古屋大学医学部顎顔面外科学講座教授就任。2003年から2008年東京大学医科学研究所客員教授併任。2011年より高麗大学客員教授併任。2011年よりベルゲン大学客員教授併任。今日に至る。

医学博士。専門分野、再生医療。
日本学術会議会長賞受賞（2004年）。
モットー：見るまえにとべ
趣味：子育て

うえた みのもる



39. 理農館



理農館は、理－農学分野の先進的研究環境の一体整備を目指し、関連する両学部の研究室を効率的に集約し、野依記念物質科学研究館及び理学館からの増築棟として計画された研究・実験施設です。

平面形状は、地区計画による高さ制限や隣棟間隔の条件をクリアしながら、最大容積を確保するため雁行壁面を持つL型プランとしています。構造的にはエキスパンションジョイントのない一体のSRC構造+PC床版で構成し、将来にわたる部屋割や設備の更新に柔軟に対応する様々な工夫を行っています。具体的には、階段室及び設備コアに耐震壁を集約することで、実験室ゾーンには梁型のないフレキシブルな天井内設備展開スペースを確保し、建物外周部は逆梁にして外壁面に配管・ダクト開口用の乾式パネルを設置、PC床版

には将来用開口を一定間隔で設置するなど今後の設備等の更新を見据えたフレキシビリティの高い構造躯体としています。また共用廊下ではケーブルラック、照明、配管・ダクト等の架台を兼ねるパンチングメタル製の吊り天井を設置してスペースの合理化を図り、メンテナンス・更新性の高いオープンな設備幹線ルートを確認しています。

外装はダブルスキンによる熱環境コントロール、配管・ダクトスペースと採光換気を兼ねたテクニカルスリット（外部吹抜け）、縦動線と水廻りコアの共有など、エリア全体の整備方針に沿って一貫した施設整備がなされ、学内でも最大規模の研究・実験拠点を形成しています。



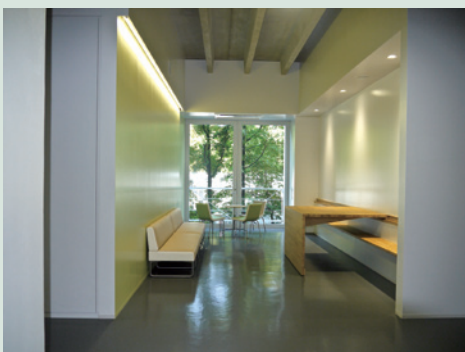
■建築概要

建物名称：理農館
 主要用途：大学・研究施設
 建築面積：1331.34 m²
 延床面積：9322.94 m²
 階数：地上6階／地下1階
 構造：SRC造



この建物外周部のダブルスキンは、既設建築同様に方位に応じた適切な熱負荷制御装置として設計されており、南北両面は既存建築と共通の素材・ディテールによる連続的なファサードを構成し、西面は理学南館と同様に狭隘な前面道路と室内側の両方に太陽光を拡散・反射すると同時に、熱負荷を軽減できるよう特殊断面のアルミルーバーで施工されています。理学南館と並ぶ低層階では横ルーバーによる連続的なファサードとし、高層階では西日対策と窓からの眺望に対応できるよう縦ルーバーを採用し、居住環境にも配慮しています。また共用部の積極的な自然換気・通風を行うため廊下端部に換気用スリットを設け、中央の階段シャフトをソーラーチムニーとして換気ルートに活用するなどパッシブな手法による研究環境の向上を図っています。

共用スペースでは、各階中央に設けられた実験機器搬入スペースに可動式テーブルとベンチを設置し、普段は北側の眺望を活かしたラウンジスペースとして研究者同士の交流やディスカッションの場にご利用できるようにしています。その他、周辺整備の一環として北側並木景観の保存と木製デッキ歩道の整備、西側歩行者道路の透水性舗装と植栽・ベンチによる修景、G館2階にアクセスするスロープの設置、東側1階レベルの南北通り抜け通路の整備等、高密度に集積した実験・研究施設において、建物の周辺も含めた安全で効率的な活動を支援する総合的な施設整備を実現しています。



1	10	5	6	7
2	3	4	8	9

- 1 北側外観 北東より
- 2 実験室 (天井仕上無)
- 3 実験室 (天井仕上有)
- 4 廊下
- 5 西側外観 南西より
- 6 特殊アルミルーバー
- 7 西側外観 北西より
- 8 ラウンジスペース
- 9 木製デッキ歩道
- 10 配置図

吉川 浩史
大学院理学研究科助教

ぶどう
葡萄の房状分子が拓く未来のエネルギー材料―分子クラスター―二次電池の開発

環境問題やエネルギー問題は、今や世界共通の大きな問題ですが、昨年の震災以来、とりわけ日本では電力事情が毎日のように話題となっています。そこでは、再生可能エネルギーのように電気を創り出す技術も重要ですが、いかに大容量の電気エネルギーを貯えるかも重要で、大きな容量を有しながら短時間で充電可能な次世代二次電池の開発は必要不可欠です。また、このような二次電池の開発は、携帯型電子機器や電気自動車などへの需要といった点でもなくてはならないものです。

私たちの研究グループでは、新しい二次電池として、分子クラスターを正極活物質とする『分子クラスター電池』の開発をおこなってきました(図1)。クラスターとは葡萄の房を意味する言葉ですが、化学の分野では、2個以上の分子又は原子の集合体を指すものとして幅広く使用されています。ここでいう分子クラスターは、多数の金属イオンと有機配位子が集まってできた多核金属錯体分子を指し、これまでにリン原子が1個、モリブデン原子が12個、酸素原子が40個集まったできたポリオキソメタレートと呼ばれる分子クラスター(図1左)を正極活物質とすることで、従来のリチウムイオン電池よりも1.5倍以上大きい電池容量を見出してきました。この大きな容量について、放射光施設を利用した実験により検討をおこなったところ、分子クラスターが数十電子もの電子を出し入れる『電子スポンジ機能』が主要因であることを突き止めました。

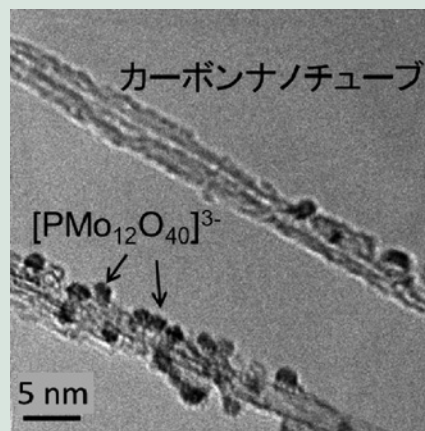


図2 ナノ複合体の透過型電子顕微鏡写真。黒い粒子(ポリオキソメタレートクラスター分子)がカーボンナノチューブ表面に全分子独立に吸着しているのが分かる。クラスターからナノチューブを通した効率的な電子移動が期待される。

現在、その発展として、世界最小のナノ電線であるカーボンナノチューブ上に、上記の分子クラスターを全分子独立に吸着させたナノ複合体を作製し(図2)、これを正極とした電池が最大約2倍以上の容量と最短数分の急速充電を示すことを明らかにしています。なお、これらの現象は分子クラスターからのスムーズな電子移動などによって実現されていると考えられています。

このように、葡萄の房状分子『分子クラスター』は、次世代二次電池の有望な正極活物質として期待され、これを用いることで、将来的にはエネルギー問題解決の糸口となるような二次電池の開発も夢ではないと思っています。

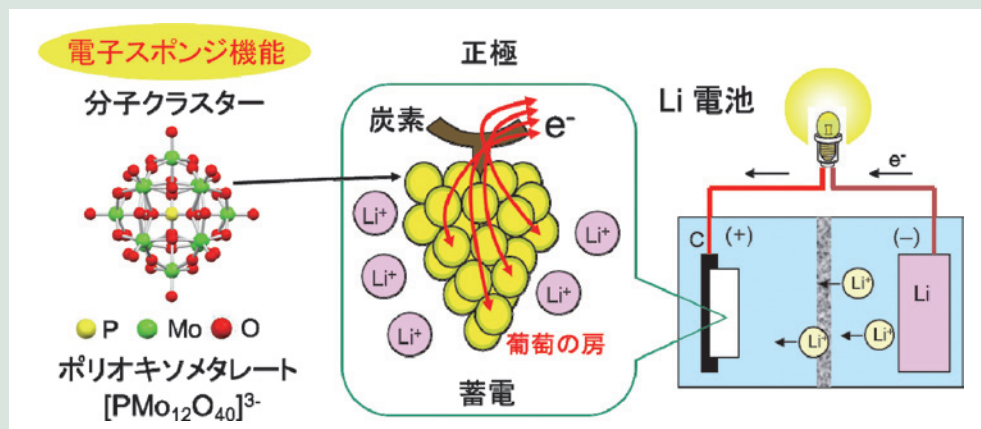


図1 分子クラスター電池の模式図。左は代表的な分子クラスターであるポリオキソメタレートクラスター。

第18回国立大学新構想学部教育・研究フォーラムを開催

●情報文化学部

情報文化学部は、9月20日(木)、21日(金)の2日間、野依記念学術交流館及び教養教育院会議室において、第18回国立大学新構想学部教育・研究フォーラムを開催しました。同フォーラムは、全国の国立大学において教養部が廃止されたことを契機として、新たな理念で作られた、部局が中心となって情報交換を図る会であり、今回は15校の部



安西理事長による基調講演の様子

局長、関係教員が集まりました。

初日は、杉山理事のあいさつの後、「新構想学部のアイデンティティ」と題するシンポジウムが行われました。松尾基之東京大学教養学部教授による「東京大学教養学部新学科設立の理念と背景」、岡田修一神戸大学発達科学部教授による「神戸大学発達科学部への改組と現状」、戸田山和久情報文化学部教授による「科学・技術時代の市民的教養と情報文化学部の専門基礎科目の構想」の話題提供が行われ、文理両領域にまたがる組織の教育・研究について、熱心な議論が行われました。

2日目は、国枝副総長のあいさつの後、安西祐一郎日本学術振興会理事長により「新構想学部の未来」と題する基調講演があり、大学の教育・学術研究政策の現状など、日本の高等教育に関する課題に関する解説が行われました。特に文部科学大臣による「社会の期待に応える教育改革の推進」では7つのポイントのうち6つが大学改革に関わることなど、大学の教育・研究が喫緊の課題と認識されているという指摘がありました。これらの点について、参加者から熱心な質問が寄せられ、時間いっぱいまで議論が続きました。

松永前経済産業省事務次官による講演会を開催

●医学部・医学系研究科

医学部・医学系研究科は、10月1日(月)、医学部附属病院中央診療棟3階講堂において、松永和夫前経済産業省事務次官による講演会「メディカル・イノベーション～大学への期待～」を開催しました。同講演会は、医療分野における産学官連携によるプロジェクトを効率的にすすめることを目的に、内閣府の医療イノベーション推進室の立ち上



講演する松永前事務次官

げに尽力した同氏を招いて開催したもので、教員、医師、コメディカル及び事務職員約300名が参加しました。

講演に先立ち、濱口総長、松尾医学部附属病院長からあいさつがあり、続いて、松永前事務次官より経済産業省でまとめられた「産業構造ビジョン2010」をベースに、経済社会ビジョン実現のための明確なターゲットングポリシーを持った「攻め」の経済産業政策と「医療イノベーション5カ年戦略」の概要について説明がありました。引き続き、取り組むべき施策としての「医療・介護関連市場の創出」、「医療機器産業の技術力強化」、「国際展開の推進」についての話があり、産学官の連携強化の必要性と大学への期待、とりわけ本学には「中部地方の中核として、高いポテンシャルを持つ海外展開の中心的役割を担っていただきたい」との期待が述べられました。

講演後は活発な質疑応答が交わされ、参加者からは「今後の目指すべき方向性がよく分かった」との感想が聞かれるなど、産学官連携に対する高い関心が窺えました。最後に、高橋医学系研究科長から、「この地域の『ものづくり』の伝統を生かし、世界に打って出る戦略を大学・病院一体となって考えていきたい」との言葉がありました。

解剖弔慰祭を挙行

●医学部

医学部は、10月11日(木)、医学の教育・研究のために御献体された故人を慰霊するため、解剖弔慰祭を執り行いました。今年度も御遺族をはじめ、教職員、学生ら約300名が参列し、故人のご冥福をお祈りしました。

祭儀では、高橋医学部長から「医学への御献体に対し心からの敬意と感謝の意を捧げるとともに、医学医療の進



弔慰祭の様子

歩・発展及び医師・医学研究者の育成のために一層努力する覚悟であります」と慰霊のことばが述べられました。

また、学生を代表して医学部医学科3年の川口真一さんが「多くの方々のご協力のもと医学を学ぶことに感謝し、御献体してくださった皆様の御遺志を無駄にせぬよう今後とも勉学に励み、将来の医療の発展のために努めていきます」と御霊と御遺族に対して誓いました。

祭儀に引き続き、解剖供養塔に御遺族、教職員、学生がお参りしました。

なお、今回供養された献体数は、系統解剖48体、病理解剖28体で、医学部創設以来の献体総数は17,358体となりました。

平成24年度脳とこころの研究センターシンポジウムを開催

●大学院医学系研究科

大学院医学系研究科脳とこころの研究センターは、9月22日(土)、鶴舞キャンパス医系研究棟1号館において、平成24年度名古屋大学脳とこころの研究センターシンポジウム「創薬に向けた脳機能研究の新展開」を開催しました。

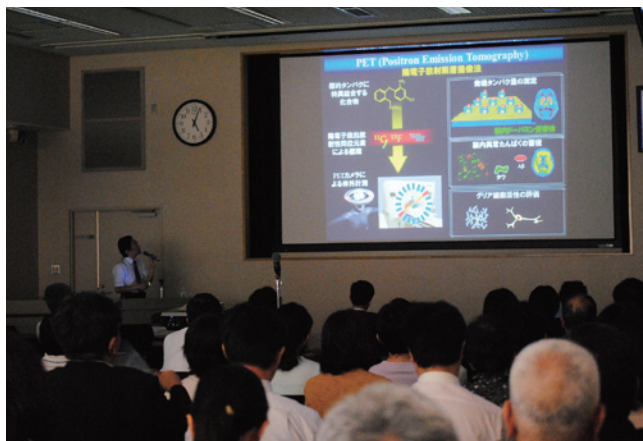
同センターは、昨年10月に大学院医学系研究科が中心となって、脳とこころの疾患の克服を目指して創設されたも

ので、シンポジウムでは、濱口総長及び同センター長である國枝副総長のあいさつに始まり、3名の講師から最新の脳研究が紹介されました。

田代志門昭和大学研究推進室講師による「脳科学研究の倫理的課題」に始まり、柿木隆介自然科学研究機構生理学研究所教授による「痛みの脳内基盤と創薬への展望」、須原哲也放射線医学総合研究所分子イメージング研究センタープログラムリーダーによる「創薬プロセスへの分子イメージングの応用」と順次講演が行われ、会場の参加者は、最後まで熱心に聴き入っていました。

また、33件のポスター展示により、同センターの研究の一端が紹介され、活発な意見交換が行われました。

一般の市民、研究者、企業関係者など約250名が参加しました。



講演の様子

農業ふれあい教室「DNAを見る」を開催

●大学院生命農学研究科

大学院生命農学研究科附属フィールド科学教育研究センター東郷フィールドは、9月29日(土)、地域貢献特別支援事業「都市近郊の農業教育公園」の一環として、農業ふれあい教室「DNAを見る－身近なものからDNAを取り出してみる－」を開催しました。

同教室では、農業を体験・学習する機会として、毎年種々



装置の説明の様子

の催しを企画・実施しています。今回は、中学生以上の一般の方を対象として、身近な野菜を題材とする実験を中心にしたプログラムを実施しました。

午前中は、DNAが遺伝子の本体であることなどの説明を行った後、参加者が持参した野菜や果物からDNAを取り出す実験を行いました。特別な試薬や機材を使わず、すり鉢やおろし器などを使って野菜をすりつぶし、洗剤と食塩で作った抽出液を加え、その上澄みにアルコールを加えると、綿状のDNAが現れました。うまくいかない野菜もありましたが、綿状のものがDNAであることを蛍光観察により確かめました。

午後は、DNA指紋法を用いた品種判別の実験を行いました。参加者は慣れないマイクロピペットに苦戦しながらも、自ら実験操作を行い、近縁の野菜ではよく似たバーコード状のパターンが、遠縁のものは全く異なることを観察し、「DNAを見る」を実験しました。

第3回組込みシステム研究センターシンポジウム・第6回次世代自動車公開シンポジウムを開催

●大学院情報科学研究科、グリーンモビリティ連携研究センター

大学院情報科学研究科附属組込みシステム研究センター(NCES)及びグリーンモビリティ連携研究センター(GREMO)は、10月9日(火)、10日(水)の2日間、ES総合館において、「第3回名古屋大学組込みシステム研究センターシンポジウム・第6回次世代自動車公開シンポジウム」を開催しました。



質疑応答の様子

招待講演として、初日には、泉達司宇宙航空研究開発機構宇宙輸送ミッション本部宇宙輸送系要素技術研究開発センター長より、8月に打ち上げられたばかりのHII A/Bロケットの電子システムと搭載RTOSの説明があり、2日目は、笠井真一トヨタ自動車IT・ITS企画部企画室主幹より、TDMS(交通データ管理システム)を使った新世代交通システムについて、豊田市における実証実験プロジェクトを通じた紹介がありました。

また、NCESからは、組込みシステムを中心に、次世代車載RTOSやデータ統合プラットフォームなどの共同研究と人材育成の取り組みに関して、産学官共同研究のこの2年間の成果が8テーマにわたり紹介されました。GREMOからは、次世代自動車等へ向けた複合材研究開発のために設立されたナショナルコンポジットセンターや、ITS・次世代型モビリティシステムに適用される大学の技術シーズを中心とした7テーマの紹介が行われました。

参加者は2日間で延べ294名にのぼり、この分野への強い関心が窺えました。NCESとGREMOは、名古屋の地で、ものづくり、次世代自動車研究の中心的拠点としてさらに強固に取り組みを推進していく考えです。

ICCAE 2012年度第2回オープンセミナーを開催

●農学国際教育協力研究センター

農学国際教育協力研究センター（ICCAE）は、9月28日（金）、農学部第7講義室において、2012年度第2回オープンセミナーを開催しました。

講演者の加藤 明元農研機構北海道農業研究センター育種工学研究室長は、ガーナ大学西アフリカ作物改良センター（WACCI）において、独立行政法人国際協力機構専



セミナーの様子

門家としてイネの分子育種研究協力を携わった経歴を持っています。WACCIは、ビル＆メリンダ・ゲイツ財団が、アフリカ緑の革命のための同盟（AGRA）を通じて、南アフリカ共和国とガーナの2カ国に設置した大学院博士課程コースの1つで、西アフリカの作物育種研究者育成をミッションとしています。

ガーナのイネ育種は始まったばかりで、DNAマーカー選抜など新しい育種技術に大きな期待がかけられています。セミナーで加藤元室長は、ガーナで行ったイネの耐乾性マーカー選抜研究の経験から、ポット試験の維持管理・生育調査などについて日本人研究者によるきめ細かい指導が必要であることや、実験施設の整備が不十分である実態を報告しました。また、WACCIの学生は、品種育成のためのシステムの構築から先端技術による分析まで、習得しなければならないことが多く、時間をかけた地道な協力が重要であることを説明しました。

第83回防災アカデミーを開催

●減災連携研究センター

減災連携研究センターは、10月9日（火）、環境総合館レクチャーホールにおいて、第83回防災アカデミーを開催しました。

今回は、独立行政法人土木研究所水災害・リスクマネジメント国際センター水災害研究グループ長である田中茂信減災連携研究センター客員教授が、「近年の水災害と気候

変化？」と題し講演を行い、109名の参加者がありました。

講演ではまず、米国のハリケーンやタイの洪水等、近年の世界の水災害事例について説明がありました。

続いて、国内の降雨量等の約100年前からのデータに基づき、近年の気候変化と降雨パターンの中に明確な関係は見出せないこと、一方で今後も突発的な集中豪雨には警戒が必要との説明がありました。

また、水災害による資産被害の増大を指摘し、「ともかく避難」といった最近のソフト対策偏重に対して、資産被害を抑えるハード対策もなお重要であると説明しました。

参加者との質疑応答では、気候変動と水災害の因果関係について議論が行われました。



写真やデータを使い説明する田中客員教授

「名古屋・東海地区における機関リポジトリコミュニティ形成の支援」第1回研修会を開催

●附属図書館

附属図書館は、9月28日(金)、附属図書館多目的室において、「名古屋・東海地区における機関リポジトリコミュニティ形成の支援」第1回研修会を開催しました。

同研修会は、国立情報学研究所の「学術機関リポジトリ構築連携支援事業」の採択事業として、年度内に連続して3回の研修会を開催するものです。学術機関リポジトリと



研修会の様子

は、大学や研究機関等の知的生産物を保存・発信することを目的としたインターネット上の電子書庫のことで、東海地区の国公私立大学等の他、近畿や北陸地区から、大学の機関リポジトリの担当者や機関リポジトリの構築を検討している機関の職員ら計21機関33名の参加がありました。

初めに、昨年度同支援事業を実施した近畿地区から招いた大阪大学附属図書館の土出郁子氏が、「機関リポジトリの意義」と題した講演を行い、オープンアクセスや収集と発信を担うリポジトリの重要性を強調しました。続いて事例報告が行われ、関西福祉大学の「小規模大学でのリポジトリ解説：JAIRO Cloud を利用して」と、椋山女学園大学の「Sugiyama 機関リポジトリの過去・現在・未来」の2つの事例が両大学の担当者より紹介されました。また、研修の終わりに設けた「なんでも質問大会」の時間には、活発な意見交換が行われ、相互に情報交換することができたようでした。

参加者へのアンケート調査では、2つの事例報告が特に参考になったという意見が多く、次回以降の研修会も盛況が期待されます。

展示会「歴史の時間」を開催

●附属図書館医学部分館

附属図書館医学部分館は、9月11日(火)から28日(金)までの間、展示会「歴史の時間－名古屋大学医学部・附属病院の歴史を遡って－」を開催しました。分館内にある医学部史料室の所蔵品の中から、書物、医療器具などが展示されました。

医学部史料室は、本学の源流である名古屋県仮医学校が



展示会の様子

設立された明治4年前後の史料を中心とし、東海地方の医学の歴史的発展過程、さらに広く医学・医療史に関する古医書、歴史的医療器具、古写真、絵画等を所蔵しています。昨年度、所蔵品の一部を電子化し、「近代医学の黎明デジタルアーカイブ」としてインターネットで公開してからは、学外者による同室の利用も増えてきましたが、実物を見ることで、若い世代が医学に関心を持つ契機となり、また生涯学習への支援となることを期待し、今回の展示会を企画しました。

展示会では、医学校設置の2年後、初めて外国人教師として迎えられた故ヨングハンス氏の講義録、愛知医学校長であった故後藤新平氏の送別記念写真、明治中期の種痘用具、故奈良坂源一郎氏の人体解剖図の挿図帖とその使用例、官立名古屋医科大学の教授であった故桐原真一氏らにより完成された軟性胃鏡等15点を展示しました。

医学部及び同附属病院の歴史を辿るだけでなく、「解体新書」や、明治中期の医者が往診の際に弟子に持たせた薬籠などの関連資料の展示に、「より広く医学・医療の歴史に接することができた」と、小学生から高齢者までの多くの来館者から好評を得ました。

名大を表敬訪問された方々 [平成24年7月16日～10月15日]

日付	国/地域	訪問者	目的
7月20日	英国	オックスフォード大学グリーンテンブルトンカレッジより ディビット・ワトソン学長	表敬あいさつ及び高等教育研究センター 招へいセミナー講演
7月23日	モンゴル	在日モンゴル大使館よりソドブジャムツ・フレルバータル 特命全権大使	表敬あいさつ
8月2日	韓国	木浦大学校より高錫珪総長、李炯宰人文学部日語日文学科教授	表敬あいさつ及び文学部・文学研究科との 交流記念行事参加
8月23日	ベトナム	ベトナムの消化器内視鏡学会よりトラン・バン・ヒュイ副会長	表敬あいさつ
8月23日	韓国	延世大学校より金判錫貧困問題国際開発研究院長、夫惠眞 同専門研究員他4名	表敬あいさつ及び国際開発研究科との交流に 係る懇談
9月12日	韓国	忠南大学校より金圭庸入学管理副本部長	入学試験に関する意見交換
10月15日	台湾	台北医学大学より陳榮邦医学院副院長、蔡恒恵口腔医学院 副院長他3名	大学院医学系研究科との学術交流に関する 意見交換

新たに締結した学術交流協定 [平成24年7月16日～10月15日]

大学間学術交流協定

締結日	地域/国名	大学/研究機関名
9月1日	米国	カリフォルニア大学バークレー校
9月21日	オーストリア	インスブルック大学

部局間学術交流協定

締結日	地域/国名	大学/研究機関名	部局名
6月15日	台湾	国立交通大学電気電子コンピュータ工学院	大学院工学研究科
7月23日	韓国	ソウル国立大学校病院	医学部附属病院
8月16日	中国	中国科学院理論物理学研究所	素粒子宇宙起源研究機構
8月20日	モンゴル	モンゴル国気象水文環境研究所	大学院環境学研究科

構成員を対象とした研修 [平成24年7月16日～10月15日]

実施日	研修名	目的	参加人数
7月18日(水)	変化を見逃さない学生対応とサポートの在り方	留学生センターアドバイザー・カウンセリング部門の業務及び学生(留学生)のメンタルヘルスに関するサポート体制を理解し、留学生の支援強化を行うため	20名
7月19日(木)	平成24年度名古屋大学課長補佐研修	本学の課長(事務長)補佐又は専門員に対し、グループリーダーとして、本学が求める知識及びスキルを習得させることを目的とする。	13名
7月20日(金)	第2回研究マネジメントセミナー	研究マネジメントの基礎知識・スキルを確認しながら、研究室や研究プロジェクト等を率いていくための課題への対応を教職員とともに考え、問題解決能力を習得させることを目的とする。	26名
7月20日(金)～9月30日(日) (集中受講期間)	平成24年度公的資金の使用に係るe-Learning研修	本学構成員の公的資金の使用に関する理解を高め、研究費等の適切な使用を徹底することを目的とする。	約5,600名 (原則全構成員)
7月26日(木)	福祉・共済事務担当者説明会	事務担当者向けに、主として福祉、共済業務に関する留意点等を中心として説明を行った。	54名
8月23日(木)～8月24日(金)	平成24年度東海地区国立大学法人等係長研修	東海地区国立大学法人等機関の係長(専門職員)に対し、職場リーダーとして役割を担うために必要な業務効率化その他の知識を習得することを目的とする。	65名
8月27日(月)	平成24年度工学研究科 科学研究費助成事業説明会	大学院工学研究科等を対象とし、平成25年度科研費応募に向け、現状と今後の動向、工学系に関する変更点及び大型科研費獲得のノウハウを重点的に説明する。	62名
8月29日(水)	平成24年度科学研究費補助金公募説明会	本学教職員に対し、科研費に関する現状と今後の動向、応募にあたっての留意点及び特に大型科研費獲得に向けてのノウハウを説明することで、科学研究費補助金獲得向上を目的とする。	179名
9月3日(月)	私たちにできること～部局受付窓口担当員として	今年度新しくハラスメント相談の部局受付窓口担当員になった方を対象に、窓口担当員の役割や相談があった時の対応について研修を行った。	11名
9月4日(火)	はじめて留学生を受け入れるー教員と留学生の信頼関係をどう築くかー教職員のためのワークショップ	留学生と教職員が信頼関係を築くために、教職員にどのような配慮や工夫が求められるかについてのケーススタディを実施した。	15名
9月5日(水)～9月7日(金)	平成24年度東海・北陸地区国立大学法人等技術職員合同研修(電気・電子コース)	東海・北陸地区国立大学法人等機関の技術職員に対し、専門的知識及び技術等を修得させ、資質の向上を図るとともに職員相互の交流に寄与することを目的とする。	23名
9月6日(木)、9月11日(火)	NUCT 利用講習会の開催について	NUCT (Nagoya University Collaboration and course Tools: 現在大学等で広く使われている e-Learning システム) の利用・活用について、情報連携統括本部職員による説明と実習による基本操作を習得する。	4名(9/6)、5名(9/11)
9月11日(火)	G30新規採用教員オリエンテーション(G30 New Faculty Orientation)	本学の組織文化や服務規程、災害時の対応方法、カリキュラム内容、学生の入学状況、各種相談窓口について説明・意見交換を行った。	20名
9月12日(水)	研究発表資料を作るポスター・スライドづくりの理論と実践	本セミナーでは、理論と実践の両面から、研究発表ポスター・スライド制作のスキル向上を目指す。	50名
9月13日(木)	「授業で図書館を活用する方法」院生・教職員のためのスキルアップセミナー	授業に附属図書館の資源をうまく活用する方法を学び、そのノウハウを学生の学習活動をより促進すると同時に、授業のよりスムーズな運営に活用する。	35名
9月21日(金)、25日(火)、27日(木)	平成24年度医療安全講演会	良質な医療を提供する体制の確立及び個々の安全に対する意識の向上を図る。	約2,000名
9月26日(水)～9月28日(金)	平成24年度名古屋大学技術職員研修	本学の技術職員に対し、その職務に必要な専門的知識及び技術を修得させ、技術職員の資質の向上と応用能力の開発及び養成を図ることを目的とする。	6名

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成24年9月16日～10月15日]

記事	月日	新聞等名
1 尾崎紀夫医学系研究科教授は幼児期のワクチン接種が自閉症発症の原因にならないことを確認	9.16 (日)	中日 (朝刊)
2 書籍:「ピグー 富と厚生」A・C・ピグー著 摂南大学教授八木紀一郎氏本学卒業生監訳 名古屋大学出版会	9.16 (日)	毎日 (朝刊)
3 名古屋経済大学学長佐々木雄太本学名誉教授を紹介	9.16 (日)	中日 (朝刊)
4 全国柔道事故被害者の会第5回シンポジウム「柔道事故0へ一刻も早い実現に向けて」開催:16日 内田 良教育発達科学研究科准教授が講演	9.17 (月)	読売
5 現代日本誤百科 (681):「防犯対策」町田 健文学研究科教授	9.17 (月)	中日 (朝刊)
6 杉山理事が本学の就職支援体制について「専門教育の技術と見識を身につけることに重きを置き、それがひいては将来のキャリアにつながると考えています」と話す	9.17 (月)	中日 (朝刊)
7 現代日本誤百科 (682):「誰かにいただいた」んですか 町田 健文学研究科教授	9.18 (火)	中日 (朝刊)
8 医学部附属病院は脳死と判定された男性の肝臓の一部を肝不全の女性に移植	9.18 (火)	朝日 (朝刊)
9 米国情報提供会社トムソン・ロイターが竹市雅俊本学特別教授をノーベル賞の有力候補に選出	9.19 (水) 9.20 (木)	日経 (夕刊) 中日 (朝刊) 他3社
10 訃報:遠藤泰生氏 生前飯島宗一元総長などととも「原爆忘れまじを世界に広める会」を発足	9.20 (火)	中日 (夕刊)
11 第9回「南極教室」開催:磯野靖子さん本学大学院生が講演	9.22 (土)	中日 (朝刊)
12 上田 実医学系研究科教授らの研究チームが人間の骨髄から採取した幹細胞の培養液を使ってラットの頭蓋骨を再生する研究を紹介	9.23 (日)	読売
13 愛敬浩二法学研究科教授が住民基本台帳ネットワークシステムに関する判例について解説	9.23 (日)	読売
14 北村紳悟さん工学研究科大学院生などと国立病院機構名古屋医療センターの研究チームがエイズウイルスの増殖を抑制するたんぱく質の分子構造を解明	9.24 (月)	中日 (朝刊) 朝日 (朝刊) 読売
15 現代日本誤百科 (685):子どもが「一歳にもなっていない」町田 健文学研究科教授	9.24 (月)	朝日 (朝刊)
16 小松 尚環境学研究科准教授と寛 政憲さん同大学院生などが作成した八事周辺の地図が紹介される	9.24 (月)	日経 (朝刊)
17 石原一彰工学研究科教授が今後の研究目標について話す	9.24 (月)	化学工業日報
18 近世史研究会10月例会開催:30日	9.24 (月)	中日 (夕刊)
19 仁科浩二郎本学名誉教授が第二次世界大戦時のご尊父の発言を証言し福井崇時同名誉教授が戦時下の研究に関して証言	9.25 (火)	中日 (朝刊)
20 毎日文化センター新講座「タテ・ヨコ・ナナメから見る“ナゴヤ”の素顔」開催:10月26日～3月22日 共立総合研究所名古屋オフィス代表江口 忍氏本学卒業生が講師	9.25 (火)	毎日 (朝刊)
21 2012年東海学生アーチェリー新人選手権大会:新井裕子さん本学学生 (女子未経験者の部1位)	9.25 (火)	読売
22 日本と中国における臨床試験の現状などに関するシンポジウム開催:10月3日 吉田佳督医学系研究科准教授らが公開討論	9.25 (火)	中日 (朝刊)
23 あいちサイエンスフェスティバル2012さかえサイエンストーク開催:10月1日～11月2日	9.25 (火) 9.29 (土)	読売 読売 朝日 (朝刊)
24 名古屋大学レクチャー2012「青色LEDが拓いた光の革命～赤崎博士の足跡～」開催:10月6日	9.26 (水) 10.7 (日) 10.8 (日)	中日 (朝刊) 中日 (朝刊) 読売 毎日 (朝刊)
25 井口哲夫工学研究科教授は岐阜県が予測した福井県敦賀原発事故時の放射線物質拡散予想について「防災体制を準備するための参考資料として捉えるべきだ」と話す	9.26 (水)	朝日 (朝刊)
26 現代日本誤百科 (686):「生産性を向上する」町田 健文学研究科教授	9.26 (水)	中日 (朝刊)
27 田邊宏樹環境学研究科准教授は高機能自閉症の人が目と目で通じ合うことが難しいと解明されたことについて「異なる形のコミュニケーションをとる方法を見つけられる可能性がある」と話す	9.26 (水)	中日 (朝刊)
28 訃報:黒田義浩本学名誉教授	9.26 (水)	中日 (朝刊)
29 現代日本誤百科 (687):優勝を「しのぎ合う」町田 健文学研究科教授	9.27 (木)	中日 (朝刊)
30 東海アスリート群像:陸上部鈴木亜由子さん経済学部3年生	9.27 (木)	毎日 (朝刊)
31 第20回股関節教室開催:10月14日 長谷川幸治医学系研究科准教授が「股関節の病気なんかこわくない」をテーマに講演	9.27 (木)	読売
32 親子で取り組むサマーセミナー in 名古屋大学2012:町田 健文学研究科教授	9.27 (木)	日経 (朝刊)
33 第23回濾過技術特別セミナー「濾過技術の動向と最近の応用事例」開催:10月23日 向井康人工学研究科准教授が講演	9.27 (木)	日経 (朝刊)

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成24年9月16日～10月15日]

記事	月日	新聞等名
34 平成24年度大学院秋季修了式開催：27日 濱口総長が「東日本大震災後、社会の持続可能性の重要性が増している。皆さんはそのために国を超えた連携をしていく人材だ」と祝辞を送る	9.27 (木)	中日 (夕刊)
35 渡邊信久シンクロトン光研究センター教授などは HIV の増殖に関わる APOBEC3C の構造を解明	9.27 (木) 9.29 (土) 9.30 (日)	日刊工業 日経 (朝刊) 毎日 (朝刊)
36 野依良治本学特別教授は113番元素の合成に成功したことについて「宇宙観に関わる研究は文化的に意義深い。周期表に日本発の元素が載れば、若者が日本人としての誇りを持てる」と話す	9.28 (金)	日刊工業
37 医学部附属病院小児科病棟を名古屋グランパスエイトの選手が訪問	9.28 (金)	朝日 (朝刊)
38 中村 光工学研究科教授は本学と中日本高速道路株式会社が橋梁の研究施設「N2U-BRIDGE (ニュー・ブリッジ)」で研修を開始することについて「橋の高齢化に対応できるよう、実際の橋を使って臨床経験が豊かな人材を育てたい」と話す	9.28 (金)	日経 (朝刊)
39 訃報：大西英爾本学名誉教授	9.28 (金)	中日 (朝刊)
40 中部在住 日中の若者座談会：翟 新麗さん法学研究科大学院生が参加	9.29 (土)	中日 (朝刊)
41 2012年国際航空宇宙展開催：9日～14日 佐宗章弘工学研究科教授と三宅美沙さん太陽地球研究所大学院生が講演	9.29 (土) 10. 9 (火)	読売 読売
42 あいちサイエンスフェスティバル2012開催：9月29日～11月4日	9.29 (土)	読売 朝日 (朝刊)
43 現代日本誤百科 (688)：日本中が「一つになって喜びたい」町田 健文学研究科教授	10. 1 (月)	中日 (朝刊)
44 祖父江 元医学系研究科教授と勝野雅央同特任准教授などのグループは頭痛薬ナロトリプタンが神経性の難病である球脊髄性筋萎縮症の治療に有効であることを突き止めた	10. 1 (月) 10. 2 (火)	中日 (朝刊) 他3社 毎日 (夕刊)
45 豊田講堂にてピンクリボンシンポジウム開催：14日 会場にてピンクにライトアップされた名古屋城の写真を展示	10. 1 (月) 10.15 (月)	朝日 (朝刊) 朝日 (夕刊)
46 上田 実医学系研究科教授は再生医療について「治せなかった病気を治すという原点に立ち返る必要がある」と話す	10. 2 (火)	日刊工業
47 現代日本誤百科 (689)：「うまくいくかどうかは疑問」だ 町田 健文学研究科教授	10. 2 (火)	中日 (朝刊)
48 医学部附属病院前などに専用駐輪場を設け名古屋市がコミュニティサイクルの社会実験を11月1日から1ヵ月半実施	10. 2 (火)	読売
49 松井宏樹発達心理精神科学教育研究センター技術補佐員がいじめのサインについて解説	10. 2 (火)	中日 (夕刊)
50 中道範人生命農学研究科特任助教などのグループは植物の生理現象が起こる仕組みを解明	10. 2 (火) 10. 3 (水)	日刊工業 中日 (朝刊)
51 名古屋大学星の会「星の午餐会」開催：13日 福井康雄理学研究科教授が講演	10. 2 (火) 10.13 (土)	中日 (朝刊) 中日 (朝刊)
52 現代日本誤百科 (690)：チキンを「食べ放題できる」町田 健文学研究科教授	10. 3 (水)	中日 (朝刊)
53 野依良治本学特別教授が科学五輪を目指す中学生に講義する創造性の育成塾が紹介される	10. 3 (水)	読売
54 第15回全日本学生グライダー新人競技大会開催：4日～9日 岸 尚幸さん本学2年生と松田光風さん本学2年生が出場	10. 3 (水)	朝日 (朝刊)
55 第24回博物館企画展「西條八束と日本陸学の流れ」特別講演会「西條八束さんの陸学と私」開催：6日	10. 3 (水)	中日 (夕刊)
56 野依良治本学特別教授、下村 脩同特別教授、益川敏英同特別教授、小林 誠同特別教授など日本のノーベル賞受賞者一覧が掲載されノーベル賞について解説	10. 3 (水) 10. 9 (火)	読売 中日 (朝刊) 他3社
57 佐藤 豊生命農学研究科准教授などのグループが DNA の遺伝子情報が変化する仕組みの一端を解明	10. 4 (木)	中日 (朝刊)
58 本学と中日本高速道路株式会社が橋梁の研究施設「N2U-BRIDGE (ニュー・ブリッジ)」で研修を開始	10. 4 (木)	日経 (朝刊)
59 現代日本誤百科 (691)：商品を「お持ち帰りする」行為 町田 健文学研究科教授	10. 4 (木)	中日 (朝刊)
60 第3回白鳥・市民健康セミナー「脳卒中医療の最前線」開催：28日 室原豊明医学系研究科教授が講演	10. 4 (木)	中日 (朝刊)
61 第8回名古屋大学ホームカミングデー開催：20日	10. 4 (木)	中日 (朝刊)
62 本学を含む国内5大学が不正アクセスにより情報が流出した可能性があることが判明	10. 4 (木) 10. 5 (金)	読売 他3社 朝日 (朝刊)
63 ノーベル賞が期待される日本の研究者として赤崎 勇本学特別教授と竹市雅俊同特別教授が紹介される	10. 4 (木) 10. 7 (日)	朝日 (朝刊) 中日 (朝刊) 読売
64 本学は文部科学省の実践型博士の5年一貫教育「博士課程教育リーディングプログラム」に選ばれる	10. 5 (金)	日刊工業
65 駐中国大使丹羽宇一郎氏本学卒業生の後任が見つからず帰国が延期	10. 5 (金)	朝日 (朝刊)

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成24年9月16日～10月15日]

記事	月日	新聞等名
66 本学が参加する「新ヘルスケア産業フォーラム」の一般向け会員募集を開始	10. 5 (金)	中日 (朝刊)
67 平成24年度名古屋大学秋季入学式開催：5日	10. 5 (金)	中日 (夕刊)
68 ドナルド・キーンの東京下町日記：文楽 教育で伝えて コロンビア大学名誉教授ドナルド・キーン氏	10. 6 (土)	中日 (朝刊)
69 野田利弘減災連携研究センター教授が「名古屋港周辺は巨大地震が起きれば液状化する危険性が高い」と話す	10. 7 (日)	朝日 (朝刊)
70 病院の実力：眼科治療 医学部附属病院の実績が取り上げられる	10. 7 (日)	読売
71 相撲部「どすこい大須観音素人相撲大会」開催：6日	10. 7 (日)	中日 (朝刊)
72 書籍：「正岡子規」コロンビア大学名誉教授ドナルド・キーン氏著	10. 7 (日)	朝日 (朝刊)
73 本学と京都大学の研究グループが結晶や非結晶と違う原始配列を持つ準結晶を冷やすと内部の電子の動きが鈍くなることを解明し佐藤憲昭理学研究科教授が解説	10. 8 (月)	中日 (朝刊)
74 現代日本誤百科 (692)：「自宅を全焼する」火事 町田 健文学研究科教授	10. 8 (月)	中日 (朝刊)
75 中国出身の本学大学院生が日中関係について心境を話す	10. 8 (月)	中日 (朝刊)
76 第11回愛知学生サッカーリーグ戦2部リーグ：医学部サッカー部が2-1で豊田工業高等専門学校に勝利	10. 8 (月)	読売
77 野依良治本学特別教授は京都大学教授山中伸弥氏がノーベル生理学・医学賞を受賞したことについてコメントを発表	10. 9 (火)	読売
78 野依良治本学特別教授が京都大学教授山中伸弥氏との電話座談会に参加	10. 9 (火)	朝日 (朝刊)
79 益川敏英本学特別教授と小林 誠同特別教授が京都大学教授山中伸弥氏のノーベル生理学・医学賞受賞に際しコメントを発表	10. 9 (火)	朝日 (朝刊)
80 黒岩 厚理学研究科教授が京都大学教授山中伸弥氏とケンブリッジ大学教授ジョン・ガードン氏の共同受賞を高く評価	10. 9 (火)	中日 (朝刊)
81 室原豊明医学系研究科教授は京都大学教授山中伸弥氏がノーベル生理学・医学賞を受賞したことに対し「山中先生はすごく紳士的で礼儀正しい方。大変うれしい」と話す	10. 9 (火)	朝日 (朝刊)
82 現代日本誤百科 (693)：「会社から職を追われる」町田 健文学研究科教授	10. 9 (火)	中日 (朝刊)
83 法律を、つくれ：ベトナム、カンボジア支援① 本学が関わるベトナム憲法の法整備について濱口総長と鮎京理事が意見交換。現行憲法の起草に関わった森島昭夫本学名誉教授が紹介される	10. 9 (火)	朝日 (夕刊)
84 貝淵弘三医学系研究科教授がノーベル生理学・医学賞を受賞した京都大学教授山中伸弥氏について「彼のプレゼンテーションは分かりやすく、心を動かされた。彼にかけてみようという気になった」と話す	10.10 (水)	中日 (朝刊)
85 現代日本誤百科 (694)：「事態をとらまえる」行為 町田 健文学研究科教授	10.10 (水)	中日 (朝刊)
86 本学は不正アクセスによる情報流出がありグリーンモビリティ連携研究センターのシンポジウム参加者や教員の個人情報262名が流失した可能性があると発表	10.11 (木)	中日 (朝刊) 他2社
87 本学に爆破を予告するファックスが届く	10.11 (木)	読売
88 藤吉好則細胞生理学センター長がノーベル化学賞を受賞したスタンフォード大学教授ブライアン・コビルカ氏について「創業の分野に大きな影響を及ぼす研究。すぐにでも新薬開発に役立つと思う」と称賛する	10.11 (木)	中日 (朝刊)
89 名古屋シンポジウム Frontiers in Structural Physiology 開催：2013年1月22～24日 ノーベル化学賞を受賞したスタンフォード大学教授ブライアン・コビルカ氏が講演。藤吉好則細胞生理学センター長が「分子レベルで細胞の構造や働きを解明する分野の第一人者ということで招いた」と話す	10.11 (木)	中日 (朝刊) 他2社
90 現代日本誤百科 (692)：衆議院で「法案が可決した」町田 健文学研究科教授	10.11 (木)	中日 (朝刊)
91 秩父宮賜杯第44回全日本大学駅伝対校選手権大会：11月4日 本学が出場	10.11 (木)	朝日 (朝刊)
92 名古屋活性インターン「ナゴ活」の成果発表会開催：10日 本学3年生が参加	10.11 (木)	中日 (朝刊)
93 法学部に短期留学中のジェームズ・ブラウスさんが10日に開催された読売新聞講座「読売新聞と海外報道」について「日本人の価値観で、記者の視点を持って中東など海外を長年見てきた岡本さんの話は新鮮で面白かった」と話す	10.11 (木)	読売
94 法律を、つくれ：ベトナム、カンボジア支援③ 日本法教育センターやグエン・アン・トゥアン氏本学卒業生を紹介	10.11 (木)	朝日 (夕刊)
95 柴田 玲医学系研究科特任講師が iPS 細胞の研究について「個人の業績よりも実現化にむかっているかどうか最大の関心事」と話す	10.11 (木)	中日 (夕刊)
96 国際俳句交流協会第1回中部大会開催：26日 豊田講堂第一会議室	10.11 (木)	中日 (夕刊)
97 本学が国際バカロレア資格入試実施校として取り上げられる	10.12 (金)	読売
98 本学の授業「名大の歴史をたどる」が自校教育の授業例として取り上げられる	10.12 (金)	朝日 (朝刊)
99 日本アメリカ文学会第51回全国大会 特別講演「世界の不幸を見つめるドストエフスキー」開催：14日 IB 電子情報館大講義室	10.12 (金)	毎日 (朝刊)
100 野依良治本学特別教授が京都大学教授山中伸弥氏と対談し若者に対し「多くの偶然とごくわずかの必然が人生。若い人は幸運をつかむための準備をして」と話す	10.13 (土)	中日 (朝刊)

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成24年9月16日～10月15日]

記事	年月日	新聞等名
101 ノーベル賞受賞者を囲むフォーラム「次世代へのメッセージ」開催：12日 野依良治本学特別教授が京都大学教授山中伸弥氏とパネル討論を行う	10.13 (土)	読売
102 医学部附属病院は岐阜大学医学部附属病院の患者からの臓器提供により腎臓移植を行った	10.13 (土)	中日 (朝刊)
103 河合塾 新・名古屋校完成記念イベント開催：20日 町田 健文学研究科教授が講演	10.13 (土)	中日 (朝刊)
104 JAPAN AEROSPACE2012対話イベント「航空技術と社会—ニッポンの飛行機 川崎 T4とブルーインパルス—」開催：13日	10.14 (日)	読売
105 「ニッポンの食、がんばれ！セレクション」受賞製品カタログ:生源寺眞一生命農学研究科教授が受賞製品よせてコメント	10.14 (日)	中日 (朝刊)
107 高橋雅英医学系研究科長と黒田啓介同特任助教は松島彩乃さん医学部4年生が参加する「医学部学生研究会」の活動について話す	10.15 (月)	中日 (夕刊)

イベントカレンダー

開催月日・場所・問い合わせ先等	内容	
10月23日(火)～1月18日(金) 場 所：附属図書館医学部分館 2階入口ホール 時 間：9:00～20:00 (平日)、 13:00～17:00 (土曜日) 休 館 日：日曜、祝日、年末年始 入 場 料：無料 [問い合わせ先] 附属図書館医学部分館 052-744-2505	附属図書館医学部分館 第2回ミニ展示会「ノートの中の青春 —講義ノートが伝える医学生の歩み—	
11月16日(金)、12月21日(金) 場 所：カフェフロンテ 時 間：18:00～19:30 参 加 費：無料 (会場にてドリンク等の注文が必要) [問い合わせ先] 減災連携研究センター 052-789-3468	げんさいカフェー Gen Science Café — [第18回] (11/16) 講演題目：「減災まちづくりの考え方」 講 演 者：村山顕人 (環境学研究科准教授) [第19回] (12/21) 講演題目：「変わりつつある災害時医療」 講 演 者：松田直之 (医学系研究科教授)	
11月17日(土) 場 所：医学部附属病院中央診療棟3階 講 堂 時 間：13:30～16:00 定 員：200名 対 象：一般 [問い合わせ先] 医学部・医学系研究科総務課 052-744-2423	平成24年度鶴舞公開講座 テー マ：「疾病予防：健やかな老いのために」 講演題目：「長寿社会における高齢者の疾病・虚弱予防」 講 演 者：葛谷雅文 (医学系研究科教授) 講演題目：「長寿社会におけるがん予防」 講 演 者：濱嶋信之 (医学系研究科教授) 講演題目：「世界の健康を考える」 講 演 者：青山温子 (医学系研究科教授)	
11月17日(土)、12月15日(土) 場 所：博物館講義室 時 間：10:30～12:20、14:00～16:00 定 員：24名 (各回) 対 象：小学生以上 (小学生は保護者同伴) 参 加 費：無料 [問い合わせ先] 博物館事務室 052-789-5767	観測知にふれるハンズオン・ギャラリー 内 容：「観測知」を理解するための体験ギャラリーをまわり、 共通する研究アプローチの「観測知」を体感する	

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

11月18日(日)

場 所：教育学部附属中・高等学校運動場
時 間：13:00~15:00
参 加 費：無料

和式馬術部供覧

内 容：演武（流鏑馬、他）、体験乗馬（人数制限有り）



[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

11月19日(月)

場 所：農学部第7講義室
時 間：15:30~17:00
参 加 費：無料

農学国際教育協力研究センター

2012年度第4回オープンセミナー

講演題目：「水田の硝化作用とイネの硝酸窒素栄養の可能性について」
講 演 者：鳥山和伸氏（国際農林水産業研究センター生産環境・畜産領域長）

[問い合わせ先]

農学国際教育協力研究センター
教授 浅沼修一 052-789-4232

11月22日(木)

場 所：野依記念館学術交流館2階
カンファレンスホール
時 間：10:00~18:30
参 加 費：無料

**国際環境リーダー育成のための高等教育フォーラム
ーアジア・アフリカにおける持続可能な開発を目指してー**

内 容：講演、パネルディスカッション



[問い合わせ先]

環境学研究科
特任准教授 杉山範子 052-788-6061

11月23日(金)~2月2日(土)

場 所：博物館展示室
時 間：10:00~16:00
休 館 日：日・月曜日、
12月29日(土)~1月3日(木)
入 場 料：無料

第25回博物館企画展

「なんじゃ?もんじゃ?ー高木典雄とコケの世界」

[関連講演会]

場 所：博物館講義室
時 間：13:30~15:00
参 加 費：無料
12月8日(土)
講演題目：「なんじゃもんじゃコケ?」
講 演 者：有川智巳氏（鳥取県立博物館学芸員）
1月12日(土)
講演題目：「苔 こけ コケ」
講 演 者：樋口正信氏（国立科学博物館陸上植物研究グループ長）

[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

11月23日(金)~25日(日)

場 所：文系総合館7階
カンファレンスホール（11/23）、
西尾市岩瀬文庫地階研修ホール
（11/24、25）
時 間：9:00~18:00（11/23）、
9:00~15:00（11/24、25）
参 加 費：無料

日本学術振興会国際集会助成

フランス国立図書館写本室蔵「酒飯論絵巻」をめぐって

11月23日
内 容：フランス国立図書館蔵「酒飯論絵巻」の紹介と詞書と絵
講 演 者：石川 透氏（慶應義塾大学教授）、
ヴェロニク・ベランジェ氏（フランス国立図書館）、他

11月24日、25日

内 容：16世紀、変動する社会、政治・経済的背景、「酒飯論絵巻」を
めぐるエクリチュールと言説

講 演 者：小峯和明氏（立教大学教授）、
ニコラ・ポーメール（教養教育院特任准教授）、
高谷知佳氏（京都大学准教授）、他



[問い合わせ先]

国際言語文化研究科
助教 伊藤信博 052-789-5282

イベントカレンダー

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

11月24日(土)

場 所：博物館野外観察園、展示室
時 間：13:00~15:00
参 加 費：無料

野外観察園見学会

内 容：西田佐知子（博物館准教授）、他による案内



[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

11月26日(月)

場 所：環境総合館 1階レクチャーホール
時 間：18:00-19:30
参 加 費：無料

第84回防災アカデミー

講演題目：「地方富士と富士山—静穏期の長い火山を対比的に見る」
講 演 者：浜口博之氏（東北大学名誉教授）



[問い合わせ先]

減災連携研究センター 052-789-3468

11月27日(火)

場 所：情報基盤センター 4階演習室
時 間：13:00~14:30
定 員：40名
対 象：一般
参 加 費：無料

平成24年度第8回情報連携統括本部公開講演会・研究会

講演題目：「宇宙システムの安全確保のためのソフトウェア検証技術」
講 演 者：片平真史氏（宇宙航空研究開発機構）

[問い合わせ先]

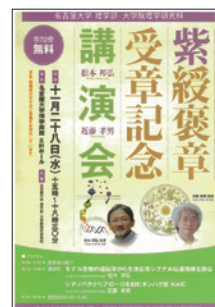
情報推進部情報推進課 052-789-4368

11月28日(水)

場 所：理学南館 1階坂田・平田ホール
時 間：15:00~18:30
参 加 費：無料

紫綬褒章受章記念講演会

講演題目：「モデル生物の遺伝学から生体応答シグナル伝達機構を探る」
講 演 者：松本邦弘（理学研究科教授）
講演題目：「シアノバクテリアの一日を刻むタンパク質 KaiC」
講 演 者：近藤孝男（理学研究科教授）



[問い合わせ先]

理学研究科事務部 052-789-2394

11月29日(木)

場 所：理学南館 1階坂田・平田ホール
時 間：13:00~17:30
参 加 費：無料

第12回遺伝子実験施設公開セミナー

テ ー マ：「リアルタイムモニタリング、イメージング—
—個体レベルから原子レベルまで—」
講演題目：「生物発光リアルタイムモニタリング」
講 演 者：小内 清（遺伝子実験施設研究員）
講演題目：「ライブイメージングで植物生殖の謎に迫る」
講 演 者：東山哲也（理学研究科教授）
講演題目：「超解像ライブイメージング：
膜交通研究の新たなパラダイムをつくる」
講 演 者：中野明彦氏（東京大学教授）
講演題目：「高速原子間力顕微鏡でイメージングする
タンパク質の一分子ダイナミクス」
講 演 者：内橋貴之氏（金沢大学准教授）



[問い合わせ先]

遺伝子実験施設 052-789-3086

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

12月1日(土)

場 所：あいち産業科学技術総合センター
(豊田市八草町)

時 間：13:30~14:30 (第6回)、
14:30~15:30 (第7回)

対 象：中学生以上、一般

定 員：30名

参 加 費：無料

[問い合わせ先]

産学官連携推進本部

あいちサイエンスフェスティバル事務局

052-747-6527

あいちサイエンスコミュニケーション・セミナー 第6回、第7回

[第6回]

講演題目：「愛知県の新しいサイエンスセンター“知の拠点”とは？」

講 演 者：加藤英樹氏 (愛知県産業労働部)

[第7回]

テ ー マ：「“知の拠点” を見てみる！

—あいち産業科学技術総合センターとシンクロトン光利用施設—

**12月1日(土)、12月15日(土)、
1月19日(土)、2月2日(土)**

場 所：インキュベーション施設1階
プレゼンテーションルーム

時 間：10:00~15:00

対 象：大学院生、ポスドク

参 加 費：無料

[問い合わせ先]

社会貢献人材育成本部

ビジネス人材育成センター 052-747-6490

ビジネス人材育成センター 平成24年度後期B人セミナー

テ ー マ：「ビジネス人の基本スキル」、

「サイエンスコミュニケーションについて」(12/1)

「グローバルスタンダードで使われる伝達スキル」、

「ビジネスマナーの基本とその応用」(12/15)

「Communications Styles」、「弁理士の業界と業務」(1/19)

「博士に必要なスキル」、「プレゼンテーションスキル研修」(2/2)

12月2日(日)

場 所：医学部附属病院中央診療棟3階
講堂

時 間：14:00~16:00

定 員：250名

参 加 費：無料

[問い合わせ先]

医学部・医学系研究科学務課 052-744-1981

がんプロフェッショナル養成基盤推進プラン 市民公開講座

テ ー マ：「生きる意味—老、病、死をのりこえて—」

講 演 者：大下大圓氏 (飛騨千光寺住職)、

黒柳佳代 (医学部附属病院看護師)

12月2日(日)

場 所：環境総合館1階レクチャーホール

時 間：13:30~17:00

参 加 費：無料

[問い合わせ先]

環境学研究科

研究員 森田紘圭 052-789-2773

環境省 環境研究総合推進費プロジェクト 「低炭素社会を実現する街区群の設計と 社会実装プロセス」公開セミナー

テ ー マ：「低炭素で魅力的なまちの実現に向けて
—2050年の名古屋を構想する—」

内 容：リレー報告、パネルディスカッション



12月4日(火)~7日(金)

場 所：理学南館1階坂田・平田ホール

[問い合わせ先]

素粒子宇宙起源研究機構

特任教授 山脇幸一 052-789-2862

Strong Coupling Gauge Theories at LHC, Lattice and String (SCGT12)

内 容：素粒子論に関する国際研究集会。ノーベル賞級を含む外国人研究者が多数
参加予定

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

12月4日(火)

場 所: ES 総合館 1 階 ES 会議室

参 加 費: 無料

[問い合わせ先]

工学研究科附属

マイクロ・ナノメカトロニクス

研究センター 助教 中島正博

nakajima@mein.nagoya-u.ac.jp

マイクロ・ナノメカトロニクス 工学シンポジウム

内 容: マイクロ・ナノメカトロニクス工学分野における情報発信を
目的として、本分野の最新情報を今年度開催された国際会議
での内容を基に一挙報告・解説



12月8日(土)

場 所: 環境総合館 1 階レクチャーホール

時 間: 13:20~16:30

定 員: 100名

参 加 費: 無料

[問い合わせ先]

環境学研究科建築学教室

052-789-5233

第14回まちとすまいの集い

テ ー マ: 「歴史に学ぶ安全安心なまちづくり」

講演題目: 「関東大震災から見える江戸・東京の街の変化」

講 演 者: 武村雅之 (減災連携研究センター寄附研究部門教授)

講演題目: 「災害の教訓と名古屋のまちづくり」

講 演 者: 西澤泰彦 (環境学研究科准教授)

講演題目: 「まちとすまいとにんげん」

講 演 者: 廣井 悠 (減災連携研究センター准教授)



12月15日(土)

場 所: 博物館展示室

時 間: 14:00~15:00

参 加 費: 無料

[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

博物館コンサート

「クリスマスコンサート インカからの贈り物」

演奏曲目: 「コンドルは飛んでゆく」、「パロマブランカ」、「花祭り」、
「人生列車」、他

出 演: ティエラブランカ



12月22日(土)

場 所: 博物館実験室、
東山キャンパス構内

時 間: 13:00~16:00

定 員: 20名

対 象: 小学校 5 年生以上、一般

参 加 費: 50円 (保険代)

[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

ミクロの探検隊

テ ー マ: 「微化石『放散虫』—電子顕微鏡を使ってさぐる形の不思議」

名大トピックス No.234 平成24年11月16日発行

編集・発行/名古屋大学広報室

本誌に関するご意見、ご要望、記事の掲載などは広報室にお寄せください。

名古屋市千種区不老町 (〒464-8601)

TEL 052-789-2016 FAX 052-788-6272 E-mail kouho@post.jimu.nagoya-u.ac.jp

名大トピックスのバックナンバーは、名古屋大学のホームページ

(<http://www.nagoya-u.ac.jp/extra/topics/>) でもご覧いただけます。

表紙

東山キャンパスグリーンベルト
で談笑する文学部の学生
(平成24年10月22日)



127 総長か学長か — 名大をひきいた人びと 番外編 —

これまでこのコーナーでは、名大の13人の「総長」を紹介してきましたが、その表記はあえて「総長」に統一しました。しかし実際には、名大の長の呼び方は、時期によりさまざまな変化があります。

公的には、大まかに言えば、旧制大学時代は「総長」でよいのですが、1949(昭和24)年5月31日に新制大学となって以降は、実は「学長」が正しい呼び方です。現在でも、法律上は「濱口道成学長」であり、この表記は新聞記事等でよく見られますが、誤りではありません。

しかし通称としては、やや複雑な変遷をたどっています。新制大学となり、しばらくは「学長」で統一されましたが、第3代勝沼精蔵時代の1954(昭和29年)10月の評議会において、東大だけでなく京大も「総長」を全面的に通称としたことを考慮して、「総長」を適宜使用することになりました。ただ、学内文書でも「総長」が使われる一方で、学内規程は「学長」のままでした。

その後、第5代篠原卯吉時代の最末期である1969年4月下旬から、評議会や学部長会の記録でも「総長」ではなく「学長」と表記されるようになりました。この前後から通称としても再び「学長」に統一されるようになったようで、この状況が長く続きます。

これが大きく変わったのが、第10代加藤延夫が就任した1992(平成4)年4月1日からです。これ以降、通称だけではなく、学内規程が全面的に改正され、「総長」に統一されたのです。法的には「学長」でも、「総長」が半ば公式な通称となったと言って差し支えないでしょう。

これには、帝国大学としての歴史をふまえて、他大学との差別化をはかる目的があったようです。名大の庶務課長は新聞の取材に対し、「七大学とも大学院の充実を今後の重点課題としており、格式の点からしても他大学とは一味違う、ということを強調するのが狙いだと思う。」と答えています。



- | | | | | |
|---|---|---|---|--|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 1 初代澁澤元治(任1939.4~46.1)。在任期間中、法的にも呼称でも一貫して「名古屋帝国大学総長」であった。 |
| 5 | 6 | | | 2 第2代田村春吉(任1946.1~49.5)。在任期間中、1947年3月公布の学校教育法では、「大学に学長を置く」とされたが、その一方で国立総合大学令及び国立総合大学官制では、「総長」の名称が残されていた。 |
| | | | | 3 第4代松坂佐一(任1959.7~1963.7)。新制名大に包括される形で存続していた旧制名大が廃止された1962年3月までは、「(旧制)名古屋大学総長」でもあった。 |
| | | | | 4 第5代篠原卯吉(任1963.7~1969.5)。この時期に通称も総長から学長に変わった経緯は不明。 |
| | | | | 5 第10代加藤延夫(任2002.4~2008.3)。通称を全面的に変更するきっかけは、2001年の七国立大学学長会議における、旧七帝大の長の呼称を総長に統一してはどうかとの提案であった。 |
| | | | | 6 第12代平野眞一(任2004.4~2009.3)。2004年度からの法人化により、名大の長の公的名称や通称に変化はないものの、大学の運営体制の変化により、その権限がより強まったと言える。 |